二十二

今案 葵巻には弓等を隠し出しけれとて後なりける源氏字は
給ふ鈴虫巻は八月末つ方の事にて其後冬は同年
より冬にいたりての事あるへし
其のあまたをいふか竹河の名はある也
まかへしのしゝ夕霧の巻
はゝしかりけれは人をしれ侍らんと 体ありけれはこそ
一 条えし朱雀院の女 柏木の北の方也
人なれはもありしを落葉のしかし 夕霧 柏木の後に人を多く
しし女二の宮をしてとかく割とも やゝおもくもの
思はれけりの給ひとなん
かし 御息所も給へと
[illegible]

慶應義塾図書館蔵

[illegible]竹の林に[illegible]

山城国ニ小野と云所二あり宇治郡ニ小野の里あり

又愛宕郡ニ小野の里あり 小野ハ愛宕の名所也 山の[illegible]

りて高野ト云所へ 此物語の手習の巻ニ夕霧の御息

所おはせし山里よりハ今すこし入りて山[illegible]

山里よりつかし[illegible]京の[illegible]

[illegible]ありし[illegible]山里[illegible]

と此山里へ御息所も行[illegible] 此律師[illegible]

[illegible] 源信僧都ニ[illegible]安養尼ト号あり

峰枕すて[illegible]の事なり 横川也

[illegible]けり 枕子の[illegible]

[illegible]枕子のさしつきのまへ[illegible]大臣のまへ[illegible]

[illegible]

此君ハ[illegible]男女ハ[illegible]

[illegible]

[illegible]舎の時着用[illegible]

[illegible]御息所[illegible]

宮[illegible]女二宮[illegible]御息所[illegible]

[illegible]夕霧の[illegible]女二[illegible]

小方[illegible]雲居雁の事也 推量[illegible]

八月中の十日[illegible]八月中比[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 小町

[illegible]

[illegible] 小野の [illegible]

[illegible]

[illegible] 山里の [illegible]

[illegible] 女二乃 [illegible]

[illegible] 女二 [illegible]

[illegible]

[illegible] 女二の [illegible]

[illegible] 女二の [illegible] 女房 [illegible]

[illegible] 息所 [illegible]

[illegible]

[illegible]

今 [illegible] の事也

[illegible]

[illegible]

一 [illegible] 小野山庄の事 [illegible]

[illegible] 女二 [illegible]

[illegible] 小将 [illegible] 大和 [illegible]

[illegible]

[illegible] 三年 [illegible]

[illegible]

うらなしたし

めでたき事なし [illegible]

詩人の詞也 [illegible]

[illegible] 信も無しとなれ時なし也

尋ぞありける人不称して ありける人は文の道を [illegible]

や 女二文の事 禄閣文の文 女房の事 女二 [illegible]

今すかしこきりぬは あしくとも也 体 人を [illegible] ね也

心のまくにんせめてゆゑありなれば文おぼえてゆゑてなし [illegible]

[illegible]

しまんの事もねと云れける

云 一理ありとや 女房の事也

[illegible]

来しいひあらはれし 女房の名のみ也

詠をきこうし 女二の詞也 女房の本の [illegible]

[illegible]

云ふは文のかたりにはしほん事なれとも人もおほし

しるしえきこえし絵かねし也 体

かく女房のうたに [illegible] 息所の [illegible] ぞもなしや [illegible]

女詞人かしや文の [illegible]

かくやさしくしおもひてしかく志けるさとの [illegible] 也 女

この詞の作者也 かくてをいかす 女二の君を思ひそ

まつりあそこし

[illegible]

男よりふかゝりし 女房詞物に書たる文の作也 花

女二の文 柳本の事に詞有て切られいはふし 地の名あり

されはくさてしは [illegible] 平かし 女房 志を

[illegible]

[illegible]

[illegible]

めいぼくなしと御とぶらひの心也
此二句之　きこえたまふ
うくは
大将すけなし
海らかなりけり　伝も無しとも是時也
宮をつくし人ハ不都にてこそ中人ハ夜ふけの心ならで
やがて女二宮の事をも禄閣の人々夕霧の事女二宮の事
すかしこまりのあなしと也体　心をつまびらかにせぬ也
心の中くになんせめてかくおりぬ事ぞかへてのりふ満
けいくすくしさへまほしげなりけねどもえれしや
女はさすかにつれなしと思ふ一理あることや　夕霧の事也
あらくもてなしたまふ
家来いざやめさりし女房達のなん之
消息などきこえし女二宮之　夕霧の返事も心にて

恋するほどの文のかよひかんまんしる事ありとも心にまかせぬ
しつけにきこえて浮かばね也体
あはれ知りてさいふ息所の御返事をしてなまめかしきもあり
古詞人々やさしき文のならひ也
かくもあるまじきかまを御も心くしうき心のみぞ
この古詞のせ　ただくしをよすけしものにて
まつかるべきこと　女二宮と思ふも
男かたふかりけり　夕霧の御心をも思ひしる文のいかなる
女二宮柏木の事を思ひかへす事を切なりけれど
よろしくみえしは京のやうなる平和にして夕霧の志を
[illegible]
夕霧 [illegible]

して根ほりは文初をつけしたるといふ息所の事之
女二宮にてつかうまつりける　御返し
と之是は[illegible]の[illegible]のなかなる[illegible]のくらしにしるく[illegible]
付く夕霧の[illegible]は大概は文の事を[illegible]
思ふ[illegible]息所の[illegible]
ならずて[illegible]なかりしと云
[illegible]
[illegible]夕霧の志を女二宮は息所の事への
[illegible]
思ひし[illegible]山里にて[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]月すゑつかたの事[illegible]
[illegible]巻にも三月[illegible]
時うつりにけり[illegible]
過[illegible]人も[illegible]
[illegible]
[illegible]女二宮[illegible]
山里は秋こそ[illegible]夕霧の[illegible]愁夕霧埋人枕
只愛山中[illegible]　朝雲[illegible]
江相云[illegible]
[illegible]女二宮は夕霧の[illegible]
[illegible]
[illegible]夕霧[illegible]
[illegible]
[illegible]道[illegible]

[illegible]祈禱なとし給ふ。文なとをつかはしけるとは御息所の御事也
女二宮[illegible]あはれ也
[illegible]のかたらひの如くに[illegible]
[illegible]也[illegible]夕霧の[illegible]大概は文の事[illegible]
思ふ[illegible]御息所[illegible]もよく[illegible]とあり
[illegible]女二宮の[illegible]と云
[illegible]
[illegible]夕霧の志を女二宮は御息所の事への
[illegible]
思ふ[illegible]山里[illegible]と思ふ[illegible]
[illegible]山の[illegible]
[illegible]

[illegible]月[illegible]の事也[illegible]
[illegible]三月[illegible]
[illegible]時[illegible]
[illegible]道[illegible]
[illegible]
[illegible]女二宮[illegible]夕霧[illegible]
山里[illegible]夕霧の[illegible]夕霧[illegible]人
[illegible]女二宮[illegible]夕霧の[illegible]
[illegible]律師[illegible]夕霧[illegible]
[illegible]道[illegible]

御こそせしられん也。御字ハ近衛司大和物語にも侍りしや
親王の御子也けれハ ことさらに侍りしかハ
はなれて人ハ [illegible] 妙なる也 人について心を[illegible]
人ハ [illegible] しと也
世にそ花 [illegible] 近衛大将なとの四位の大将監は
近衛つかさのせしと也 花しらぬ位にうつりつる大将監
といふちかきみえるか五位の其之一大将監なりと
心のかかりのうえるると也
さかしまにいのちうしと夜も明り給ひてそのあたりを御覧
之志なるへし 謹才 まつやのしるし出る也
其その一 今栗栖野 山城国愛宕郡小野郷上賀茂なり
栗栖郷は下社領也 寛元二年十月廿五日陳定朝臣家にて哥合

なほきこれまてのぬけは栗栖野にかりにやまとちかうらなとしにて
さる也 又愛宕郡にも小野栗栖野ありとあれは [illegible]
花琳家之一義にも栗栖の [illegible] ちかく小野なと [illegible]
一説にハ [illegible] 東の山の小野にて有 [illegible]
一説に又愛宕の其郷の其近くも之行そて小野と云 [illegible]
出たるハの [illegible] とに花上愛宕郡の小野栗栖野ぞ也
[illegible] 小野の [illegible] ありと [illegible] 花ハ小野の小野 [illegible]
猪ハ [illegible] きりや さ 桜の [illegible] の [illegible] 萩の花ちる
見なから行く [illegible] 河 花盛りしー
道すし [illegible] 久 [illegible]
[illegible] 人 [illegible]
[illegible] にてしも也

又おなしあはせのてしや かすとし おほかたのみへ

いとしほしきに 女房共のかつらし 卅十三行

おほかた女三の詞に心あやしきめのと

おもひやりしとてつらきものゝ心也 かくいてしかなしや

なしくみしとし卅二帖のおも也

いとかうろくしゝみ君の詞也 他人かれすかに

かゝりあくをし君返かあはりさ思を一ゝそはめ

うき身のうへにのこりとゞまる女房の宿所へいらせ給ひけるにや柏木のこと
何かと申し出でゝなげきのかたみせて心うくなりゆく
いかにもうつくしきつゞきしのべ
我のこゝろやすく思ひけるにあはれなる事の世にある
はかなく上なき恨をあはれなる御事ぞ神にも思ふ
いまはの際の縁とせよと女のくらゐのまさる事
とうとくおぼしめして柏木のよしとがの一柏木のさま
してあるかなきかの女房のよし知る事もあらばとて思ひたてまつる
名をのこす世を世にすてゝ世をさるゝのみ見えし事を
あはれの我のことをあはれみて女の事さあるにつけても人にまさる
十一年やうやうあはれなり
ことわりに涙ながれてあはれなる事なり女房泣く
さてとめて吟じ給ふ也女房のくらゐ
いかにもひとつのあはれの心ありきぬ世を去りてあとを思ふ
女房の世にあるべきこともなくあはれなる事をおもひやりてかなしかりける
よき所へうつりけるをたのみて佗しきにつけても
そしらぬ花
女房のよしありし花は女房のおもひあはれなる詞也　花　女房の詞也
世にありしとのみ思ふやうなるものとも給ふ
まことに我世中をも捨てゝあはれにおもひやりて
なにとなく給ふも女房のこゝろとこそ思はめ梅のさかり
我も人もよろづの事をあはれと思ひやる事の世にある
さてもあはれなる事をあはれみて
かくのごとくあはれにおもひて御心をやすめられし

大かたはいやめ給ひし女三宮の事 柏木のあはれなる事をいとゞ
女宮の御心にもさる行ありし一向に我もあはれ行しけるは
まめやかにおぼしいればせつかくいとはしく 体 我也へ云
冬の夜はさむきやうにてとまる事の御心すき
ちゝ宮へはなむし給ふ君
元のうちなき世今はかゝる修行そもあはれしく
月ころ又なるさまし宵々多く忍びくらしつ月頃て
ちゝさきをおもひし
月なれゆくしひし堂にてあれ給ふなくなる也
女君の 柏木の事
うちにもあはれし 柏木も女宮を思ひおもし給ふ也
かゝりし女宮の柏木の事を思ふ給ふ也

思ひのまゝかゝりし柏木あはれしく かくれし人 体
柏木の事のみにもあらぬしかなかのいとほしき給ふ
よろにかくし女宮の御方柏木のかくしと
大殿にもし給ひの御をくれし女宮もひとつ
院かし朱雀院の御事
文は両の方のうちにも両人もうちえ給ふし也
あはれしおぼしかし御かなしみを
かくこそし女宮をもして女宮のあはれ
女宮思ひ給ふきつくねをしのびすゝ
人々ひとつし女宮あはれし給ふ心さ
ありしもやうなかし人々体ありしのまへ事也
そくしいろくいそのかたへのにしひかりあまた

詞の下にはあらぬその詞をさしおきて一声にてたゞくきこしめされ
とゞまりしめされていたゞきたる也 付
物かけ寺にはありし 名誉の先達あきらかにて見せて給はんには
文の心おもらしてやすからんと我身の思ひにて物名
心すゝみ一度すゝめてかくいたしまいすること也
の事也すなはち我身ならんおもひいりせん也 伯
花実をあつめし名誉に功労にも先をえ也
道をねらはし 引 名誉と称はねらひて草花を扶持ありておもね
[illegible]花ご我の事実也まいらするはともされと人の
まいらんとせんともふせんと見えて[illegible]
陰名ならんとものにふりて事もありやしとも也
[illegible]ねたく人のよそ[illegible]道ありは思ひとも今かなはぬ

[illegible]小ありしとなれときはめ有
名ありてたし人くだればとこえければ[illegible]
[illegible]善へとやとも女文の心之如く
の心を同じて給ふ之 引 かれ名をとしくへのいひてまねて
名の一つとそるのみ 陵様
よけゆん草葉の一世二文の世にぞ あめの前に[illegible]風露
ちるらく ひとくぬ道ありは ある世行うしろあ道へくる
かこ給ひ来りてぬる道を[illegible]やその世にぞ一名誉
我ひとつを打行ん人とも也 我のぬる道ありはその心をかなし
かこそけ
今[illegible]イトヲ習ナルニ依[illegible]我ニ文ヒ有ナセントヤトヨメリ
おのあ[illegible]字体同じ 濁て声[illegible]一集とよくよも

宿からは人の心に云様也心に二字

やすらかなる人にて夕顔はなにとなく心にかゝる也極信なる事也

今更よそに見るべき物ならぬをさてはなりけりと

思ふ所なるべし源氏の心よりもこまやかに深之

かのあやしき夕顔の心

また朝顔もそれぞれ秋の錦を山里の花のさかりを

六条院のはじめ色数重の宮之

宮にかくされし雲井床住之　花　小野の宮を思ふ所也

人にいさゝめなし　夕顔の方也

花とし夕顔は花と花の里は常に用意之

夕顔をかくしたり花の里は也　花

松風はかはりし香ばしき

[illegible]

源氏入る也

[illegible]小柴

[illegible]

[illegible]

思ひはなし名号なくて有とすくなしとてのち
こゝのうめいしそくしめんとうすしとせ
ほとけいはくけれくし名号はいのちの河をうる
身しのをしらあるなし神のけしや入しをふ我をわれて
おもれんらするは号をとめてよりしちんくうとしいかゝ
とくらん字へ下ありたゝ我身いうしうりと文へく
我へつしうあそしへの体
かりすり物らし身をうて悪しく母らん見ずうり給ふ
体物いんずり家り
身らえきすし我意やむけしこえらこらぬ無明
迷てもりまそうれ 名号見ん字ろうとき
迷しめ家しきたろし いろものみそいかれ行事て

いかりはらし女房衆思ひ之
出家とつてをもし名号をとなへくさし
けかるゝ心し名号のはてさんすゝむとせ也
あくまやつゝし業障ふんえうちくとおろかれいは
返法をとけへくかつて来れは我をうつとせ 迷両位之前
さて事もし物すゝ事か近之いとおやちくさせ一 菩提持とせ
何かわるくし法師の衣の庵之 忍あひ書つけをし又身の行法と
いくさせつゝわれ大切の之 二大事し 名号の祖母のをくへ
一かうしゝし一為色すくとし かうさいし女妻は子を産をけれて
たゝ法のかたせ 文部敦の名わさきれ
かへこて法けし 女三文のおは云ひ行りけとせ
からやの御とゝ 能延の所へ 人めかかけし切え公かかてさのまつ

いとゞあはれなるに一條御息所の御かたの
かりそめのやうなれどもゆかしさのうちながめ
わざとがましき瘧病氣の事かへりみたまふ
夕霧打やすみ給ふ所に　御息所の文
とゞめてありしも條ありしやうの所を對面あらん
事をねがひしも夕霧をまたれたる心の
うちなるべし　一條宮女二の方の御事也
さそひもなくしさては男のほどなくてありしも
いとまめやかなり　夕霧の事也
心やすくしかゝる人の心又首睒の御おもひ
かきなれぬ事いふ女房共がうちゆかしき事いふ
夕霧のいかなるつゝみもなくかへりいふ

いかにせん御息所の心より御かた
御息所をとめてしも女二の宮にこれをとはれ
かへりし事此御返事
御もののけにて夕霧ゆき御息所の事律師の御返事
人のつゆきこえし御返事律師の御息所の心を
さてぞ何ゆへの人の心の思ふ
物の[illegible]御息所の[illegible]
又そまりつゝもほしのぶの[illegible]
ゆるしつゝも思夕霧と[illegible]給ふ也
さりとてかくてもし[illegible]御息所の心[illegible]
この御[illegible]御息所の[illegible]

もうしも行ハ女二の宮をハ我のかくらす付給ふもの也
さりとハいとゞいひてえさりてねる也
よりて志ろへいりしたまひきよりしつりと申して夕霧
の事を志り行ひハよきぬ也
此人ハもし人ゞハおもひの人也宮をも知ぬそてなくきて
行ひくハ行ふりあり行ひし女二の人也
ゑらのさらしうし やうてうゑらぬ女二の人ハしすく恋死に
行きの氣 気のあらくる事之と云ひのあり時の前うろへし
あし代の筆之文体
おしくゞさせさすりや
のりかさへしかねの行宮とあへひ行りの給はりいそく
ありてこえて五行二宮し御身ゞ也

かけゑへ行かりし宮を宮のきて行ひくうらはさ行女二
御ねハきぬと也 されくりし女二の人之
此事のゝ行すし夕霧ハ今思ひけ行りうりもあくる也
柳木とちかろし事又柳木をそれしけし宮と本り
柏をおりせなりし事あしくと也女二の人之
六くハかうてもやうてし夕霧の事也
まいそいうひかくし人の言之をしそうハ夕霧へらうゝ文2
我の三事も行ふいましてうけ下しと也とれせおりへ
夕霧ハ事ハせあくし思ひし
甚うしまれしうまし宮事うれ事をゑらおりしけるし
なれくさらししせし女二宮（女二をとハ）
中への人の女のしてゝ霧なとすめくとしとしてゝへ御そうけしてゝ宮

ゑもんハ猫を思ひ給ふあまりに女三の宮の事を思ふ也
かへし哥
いかにせむしたひわふのこせ
たのみなんもしかるをとめられて女三への乳母也
いまとてもうしかたにも衛門督の女三の宮の御こと　[illegible]
さらぬたに一日不見如三月　白氏文集河
のちのかなしさも猶まさる　細木せの心也[illegible]
いかなるしるし文をかたりてひとりあるへし
あはれなるうきよをかへしとも　はかなく十方の款
女の御間にもひとつにたのみたるかひなきせ
衛門の御しこし女三の宮の御方へ
いまさらにいはむかたなき衛門督の女三の宮の御心にかゝる

衛門督ハまことをいひ給ひなん
おもひよるかたもなくし衛門督のうへし女三の宮へ作給ふ也　[illegible]
なをさきもいかにすへきハ女三の宮の御かへし
この御かへしにも衛門督の御事を思ひしる
むかしをおもひ出て衛門督のむかしをいひよせ
めもあやなる胸あく事也
[illegible]
人を思ひてあはれなる衛門督の心　多くの事を女三の宮に
もてなしたる衛門督のかたらひ給ふ
[illegible]
御心ぬすみにし衛門督女三の宮へ御息所
このくるしきに哀をはしとおもはしくの事也
女三の宮にかたらせ給ふ心ありのけはひなと
あくしてかく聞えさせ

かへさくくたかへしさいかなしきかなしみあはれなる御心の内
いつくなりもきこえたり 庭のおもてすさましけなり
めつらしきかたなし御心もすくはならぬなれ
ゆふきりの宮へなれし夕霧らの大将殿へ入せらし
あさましき 夕霧の御つかひ

まつりことハ御方としても行すとせよとのたまハせけるにおもてとほし
あくまてこれをいかにせんとせさせ給ひしをいかにかはせん
さやうのたよりおもひしもいとこそあさましけれ
夕霧のまへにてなけきて
われかならすしもよしとおもひしかと
柏木のなきあとをこそとはめ
とおもふ給ふなるへし

結びて 夕霧のはからひにてみやのふた所にて
給ひしを小野の山さと此御事にて
行幸の時もあひまいらせ給ひし事をきゝて
御心しけからすきこえ給へりしなり
うきさまにてうらみもやすからぬ
（はさまれたる紙片の書入れ）

すくれはてし御名の立事ハあらそひつゝ
宮をハすてし給ひしけたまはらぬやうに夕霧
の御心ハぬしくならぬハおもひて母宮も
なくなりとおもひくさよりしとつゝにてやあひ
給ひしもえこそかりしに息所の思給
ここにひきはなさし夕霧こそひ来り給へねて息所の
致仕大臣の柏木の君をすすめし柏木落葉の
宮にまいらせし事
大臣のかたそれし人の事ハもとよりあれとも宮
りしとしちかくてもかく柏木なくて女二の宮
よしあるありてや落葉の宮に
夕霧ハおもひけいける

うつはさてくだりのよし〔…〕[illegible]
こうていにかきよらん庭へ[illegible]
かくてうち[illegible]中へ〔…〕
よろしくはれし女房たちの文をみてかへりなむとし
あそはさし女房の歌詞
にはさむかひをかきし一首なり世三の一かへしては[illegible]
あらはされをたのみ此にたらん[illegible]
せんじ女房の名[illegible]
[illegible]一首[illegible]名[illegible]
や[illegible]名[illegible]
[illegible]
[illegible]

すくなくはこし名の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]息所の思所
[illegible]女房[illegible]息所[illegible]
[illegible]柳本[illegible]柳本[illegible]の
[illegible]
[illegible]
[illegible]柳本[illegible]女二の方
[illegible]
[illegible]

大原のさとにけれは四恩院の仏栢木文殊仕立の事
ゆつくの絵しし夕霧人の殺をきこえて恵心から発る
そのしをめくし恩院の文乃詞をのつかう文へとうる所に
ありかりあれなりきさうかうと也一此恩院の諍とそわれを云
ゐさうひとうなうかうとも也そのまを夕霧給へ書給也仏
そくのしきこへし文字を筆書えてあまてしれすさきく御
息所めーしれむとも也
とくらぬし文字所のこ文乃書しめし奴を書ててとの
よってしん夕霧のも朱書にうかとかうらう也一夜て
きまらうらうしやし柏の宮代てゐめく云入らんとすと
やうかへして恩院にれのきこしからとこ。申。

柏きらしせ給ひし柏の宮代をとなし文字をこ人給一
文字霧ましきら升居の事
こまりいうつりうーし先般文字事あうしく
きうくふうしー雲井居のまへと思給
争ひのんりしし山野へ出入あうさけ出凡怪給へと
もらうしきこさや
ちくて勘当のひちてことしあつ申を給ひちくまへ人
ゆをめ我意つよとらんとりしりらしつしかま
小君いかうらかあうし雲井居の事
うんのやのくし夕霧の小君のさくら給事と云ね
うくつかもみてとも一わし給とや
こらしいさうしこされの給ひとらり

六条院の御……雲井の雁の……

……のせうと……

……のうちのことを雲井の雁の……

あさゆふ……夕霧の……

……殿の……宰相……

さても夕霧……平人……やしき……

……夕霧の……雲井の雁……

……とせ……ひしきしき……

年月……雲井の雁の……夕霧と……

らひ……

……夕霧の……

……夕霧の……男の……一人……

……

……を……と……

……女を……小雄……犬は雌也女は……男は

……妻……

……夕霧の……小君……

……男……

……土……の威……

……作花の……

夫婦の……

……

……恩の字……

……聴の字……

……諸河……

ひきわかれし後かなしさはけむなしかるへし雲井雁
かうかうしくかなしきやとて雲井雁の歌の上の心をよせ雲井雁
二 夕霧附也
かくてくらしかねてもはなれかたき人のありさまにつけてもおもひはなれかたきを
おもふすちは 夕霧は逢見ぬ御との折ははかなき心をあら
そう夕霧十二雲井雁十四歳逢初給ひし事少女巻源氏
廿一巻少女 夕霧生年は十二巻源氏三十三歳夕霧十二
雲井雁十四歳 此年 年数合
にほふ 夕霧関守にてしらぬ心のうちのくるしさ
おもひしらぬにはしきまうけし 夕霧の心の御女房たちはしる
左大臣殿は猶しらす 大宮乳母の六位宿世とそしりける
我もありし夕霧と雲井雁との中をこそよくしらむ

しのひやかにしてもなきにしもとて也
あひおもひしかに女二の宮の事 あひおもひなれとも手引は
めのとのもとにて六条院の御時に女二宮の御ためにこそしく
とゝ夕霧の御遊あはゝ文は御出しまゐり事にもあ
まして おもはくや 此年
夕霧はわかくして 夕霧ならんと思ふにとありて 此年
大宮のめのとに雲井雁のめのと六位宿世とそしりけるをきゝて
おもひあまりて 求つる君のふしなれや あさみとりなる
ありけるすりにて 求むる人也
ひとくし 月のあかきはおもしろく胸
けるはけり 我は
ほとゝきす 夕霧なれはかしこき所にいはおもふ

ちりくるし行人 筆

おいおりこしめんとよし名高きをきゝおよひぬれとも[illegible]

[illegible] 里見えて雲井居思ひ行之

そのよも思ひし雲井居のゝ

ちりして行ところ世事にそはぬすりまゐりしところ

ちりさかるしありひ行人とせ

忠や思ひてし名高く心ちやしくさねゝ山里て[illegible]

さゝれん花ちる里人又かくやしほんとせ

おこり雲井居の心かよひ文を知くとせ

しも紀の見え山風ゆりし雲井居の胸をもつ嵐の事也

とや又いふを言つはまゐらせう

かくかうちり[illegible]ゆくしうゝけうちしまへしと也風[illegible]

おやましくゆくへかりことゝのへゆくらんやりぬらんとも也

そこみえつまし名きりの詞し

世の人行名高き世のならずして行くと也

しせ居らぬ人にも名高き人からぬなる程との[illegible]

名高き詞也

おとらぬるきしめゝ言も[illegible]雅人の心の一枚にめ

家代々名人とも文字の家の家也

もふる者てし名高の心やとて[illegible]事也

おかしきにおもひし世に息なりゆくて思ひあまりて[illegible]人也

ゝくしてし心のめくらしくらぬうゝれうかゝ

山のうらすらし雲井居を名高きのうちぬ行く也

和歌の名や前らの[illegible]

くしらくの綾ふし更年なるの事と
やくしきおふろしを好へのかまへ
らく日もし九月九日ニおもりて法華修肖之嫁娶なりく
つくも見日としく夕暮の思ぞろう竹て
の出さうふし女二の夕きりて見けるやきんと之暮れぬ之
ねよく人事はしてし四日ハいつくかみをいふとものをして
よのうん女好山の上てうちつ青年の髭あして恐んをりける
是ゆかりし家生前のうての色する之夕暮の心
いとめかしき一丈の祠家生前やしの丈のの事之
此竹男の好すむし家生前のおし一夜いりめ家をかけれと
ゆうの好合うり家るるの枝もえひ屋へせしとおもと
徳るを之　秋の好れし家遣らけしんと家の事ハつくし

あもうあつうつ行業ハもおもしろしと也
よくのは心ありそ之かうり三新之三わのハ諸家熟と之之上
祠のよみのりしめきこゆるをあめや家けまてく行のハ諸家
熟よりおあるせ祈ハ探するうえるるをとしあれ様
うめんさ一夫秋とあり祈ねとも之むすよう之上に
亀しと家家熟あり罪をとる事せ並うきまけんに新た
こいりと思つくとも行ふの法ハ打おあく又ちんと夕暮の
水入有さま之秋をとく新しめさんとされとも行事もあ
かうしかくとおいる本のを秋えるのやうよおおいるんとも
家あしいてくし世二の事之夕暮れん
え人しまとおくし務の鞍ハ道身の条ある
大おいハ傍見をみしはらふたえ花

一 此の大丈夫にはふさのせしといひしハ、へたゝしとあるへし、おほかた
つくりことにいふハ夕霧なれとも
へたてつる大将殿にもとの人の使にて詞を夕霧のへ
おしこめハともし家主大将のうちにもたれかゝり夕霧を
御のふみと なのきこえさせし中息子方より文あまたす
ことなしさまけちやめんしとも也 附
ふためつからもてかし家主ののち夕霧のせかしとてきこん
いつれのしりそてさられく〳〵夕霧の跡遠かるとも世かしこ
とんとさりてんふかしいつかれへてのちにはとて
ともされかた女かひそてみし也ありけり
色もかけくゝ夕霧の女二乃宮何事を何となく見給ひし
御前くめ御物おほすや家主宮のおもやくこ

まいらせたまへれハ家主宮の御ゆるしよりて女二と
夕霧との中を思ひ合せて誓ひ給ふや
御心ふかき人女二宮は実事なけれとも いかにしても離れ給はす
はかなしとは夕霧のまめ人なり
かくいはれし息子の文は女二宮の心を思ひ給ふ 附
思ひそまつりもしけれ息子乃宮を見給ひ
くやしくもしは息子乃宮の御心ふかきを見しら、女二
つれなさかな也
なるかぬ君なりしとし家主宮の御内女二の宮くは行く
いかなる事もし宮と契りむすひし後夕霧のおとさせ
心なき事ハ夕霧の実事なくて宮の御心あらんとて
くやうなり 忠臣不事二君貞女不更二夫 附

扨ひめ君ハ柏木をハはし給ハん事を出家させ給ふへき事也女宮の心也
御いのりなとめさせ給ふ 書籍なと也
次第に柏木の父致仕おとゝ也 ゆるしハなき事也
去ぬる世にて猶まさりたる事とおもひしも女三宮の
大事をかうらてゝ柏木ハとくやく別給ふ事を
かくる世のうきてのこるも見るに太宮くるしき人
ふるの名をも御息所の給 女宮ハ女二ハかなし給ふ
よそ心のへて人生ハちかるゝよれつ子のいまは宮との
女二を給ふて思ひ給ふ事わりもなくさめて御
心付 落葉の事也 こよなく給ふ 女宮の心を也
ほとくとし 女宮を恨み給ふ也
つとめ給ふとしあはれ女二の宮の御詞也 御息所の

此給ふとまうさぬ給ハぬん也 更衣なりしかとも
の給ふ也 御息所の給ふを宮の思給也
うちまかりつゝ 更衣腹の心女二を見給ふ也
人にとりつゝ宮の御事也
[illegible] 柏木女宮をすこしの事なる也 よろしきちかく後見也
いとほしかりし御息所の御かへし也
かなきちかひ 律師の詞也
佛も[illegible] 權者の祈りも叶ぬ理也 されは
成就不成就の道理をあらはせり佛もなく覚えて
[illegible]
宮の御[illegible] 女二の宮更衣腹の[illegible]
太政[illegible]女宮[illegible]

けしきなどのさまいみじうひきかへて参り給へる
へまゐりたまへる御方の御さま也
まかりにけるよりのち女三の宮の御方にさぶらひし
おほしまする事（源氏の君と称）
こよひぞおほせすこしけしきことに思ひて給へるこそめでたけれ
のたまはせしもあはれなりや
御前へまゐり源氏の君しおぼされずしてあはれなる
かくたのしび中の事をのたまはせし女三の宮の御方へまゐり給へる
文をたまはりし女二の宮
さうざうしきは薫は宮をおもひし所
御のあはれにおぼえし給ひて女二の宮の御かたへまゐり給ふ
かの大将殿も柏木の父上山にこもりし朱雀院の御時也

女の御事朱雀院の女二の宮の御かたの事也
目もあやにおぼしつゝ朱雀院の女三
の宮をの御事目もみて女二の宮の
ほかにもさしつぎて恩寵ことにおぼしめして
とあはれなるやうにおぼしめしとぞ
大将殿は女二宮の御事をおぼして中将の君の事也
あはれなる御事女房の御心にかなひて目つ
きの事也 蔵人の今日まで日数
しかうえの御事 故入の大将殿をおもひし
御のあはれ女二の宮の御方の御方めで給ひしに
給はりける女二の宮の御方へまゐり給へる
女房たちひそかに女二の宮の女房ともひ給ふ也

女三へ宮子うみ給ふのさまあはれなりし
めのとたちし女三の方にありける人々やまひの心ありてなけく
おもひやるへし　今のまりも人くるしきをしむつかしき
よしつかまへこらへ給ふ夢とも語りいてきてたゝ御
文を宮をいたつら事をときくにゆくかくのはやき
かくるへき給ふそしる夕霧の事へ　柳木のなやましく夕霧に宮
おほえ給ひし宮し古き大将の御事ゆへなやましとも
人々わくさうくすなる給ひしと女三宮の大将をさりき
事とも思給ひつるへし
さうつきとは生死の定てうちいへるともしとて
いかなききこえさせ給ふらし夕霧女三の宮にやとにいふ
ことより御物なし

かしはきの夕霧のゆつる心ひきたゝへ御ありく
まかいしさらにいて女三の御ゆへしらぬ事を
思ひなし給ひ女三の御ゆへ女三の御心かうそのおもひすこし
よく夕霧へ女三の宮そかひ給ふせ
いつくも世給ひつるしゆかしゝ夕霧の事をきこえさせ給ふ事と云々
此段可用所
今すこしかうきしき夕霧の為の
そのあまりにかし夕霧の詞すき宮心のやうにも宮ゆらぬにと
かのおもひわけてきえし御息所の夕霧とこそかの御事の事を
おもひ給ひしとも思ひしなりけりし熱とかうちこ
かくらへこはかうして夕霧をもらうしやしなうひとくはかねも
定うるまもしれて柏木の外なりけるやとにあやかる事もあらん

かなしさもあはれもいと・愁哀も相かねたるなるべし
我なきあと・女房たちの人々(行つゞき)
のおもひしれりける事も・此息子の卿のおもひのほどもあはれにや
おきうかへ・またく宮中の愁哀もかならず行はるべき
御いたみにくはゝる行也
これによりては・宮中のたちまちひきかへ
行しかば思ひいでられしくおほくなりてしかるべし
さるはきみとしのほど・女房の御所の御おぼえめでたかりけるのみならず
ひつけ行也
それにまつりごとつかさどりし世にすぐれ
そくしの人・此の人もそへし・女房のまく
又そのかみより・君の御めぐみ・親子のおもひふかく
宮仕へしつかへまつりし事・人の心をしらで
あはれなるもの也・大かた女房・山のおくなどにてなりて
京へ出・さてはれなきいそくやうの人
ならびなかりし事共・世上の人にもおとらぬほどの心もちて
すぐれたる女房のなほしものを行ふべきものなし
又は是等も行ふべしとや
行ふの道もとをはじめて・服者の任行へる也
國史云延暦八年十二月皇太后崩天皇錫紵避正殿
御西廂率皇太子及群臣挙哀
錫紵は細布也・紵は麻也・一表服也
諒闇もはじめ・間のまゝ
いのちばかりあはれなるかな世のありさまいかにあはれなるかな
ましてよその人の

けふゐんてもしりて、いそしゆらんし、ゆみの事く
き〳〵かくさるしきと廿三のんぞをうつへんなることわさ
なしきことや名誉のくるうかき事比へて家にも失なること
名誉を恨なる〳〵
うしひろく参りきてし、此息のんて名誉にあ聞あるしとこ
能ひしはけうつんうりしを思歎く失ぬしとや
此の世にも謡ときこえし此息市の罷障あると云ふ事ん
くらきこえし廿二乃あらりのんてくゝ
むかしよりつ名誉といひくし行ひ罷あるとし也家ん
是も〳〵行なるも意て名誉のあるを也
ましくのまら知て、ふし、ゆかにめくしみしてゐる葸
正風の事を裳して、うひく意る名の方へしあり

てうく名誉思ふ也
被んていつれく志あり、身上の敬にて此ゆ下に衰ふる人の関
うれしき抑くし世上の事を思ふし行へ 名誉の心也
大家の先祖なるし名誉の祖母へ 首許を思ふる〳〵 名誉の
ちかの故なる風さしもし柏木の父へ 雲井房の父へ
こうつりの世にあられし 老去すれうらこや
志うやけうくしきしらくて新理をけうきまれつかれ
事を意ちしのあるく大うく成るもしきの事にれを志き
倶に深うあるこまい深くしの志とこまひしとや 名誉の
当りしい孝養也
うらかりき、名誉の約束子のあらかくき思ふしりあるとと
放楽の縁にし 衣の短かくはらくせらさりまつら

より於別のむしの詞ハ…とや

人の心の中にしんまいてし　夢のうちに東也

一ゑんのそう作し　名夢ハなかに行之

廿君ハ夜ごとに…雲井居の空に廿二文字と名夢とよ

あなんしさて思ひ行ん之　夕かよひ

そうなきうよりし雲井居より名夢へゆきて中空に

てられるまゐ帝すとや　引うき名しし名夢の内子也

あまるをもし言やうる居の空之　有や文字をうハ廿二文の事

あきらへ私るそう文字流一些しうとや

わか恋とし　名夢の心之

に宿の内外ふし息亦の事ハまりハ如物とぞ也

事ある書山し言のさてしと云へさし御ん之

いはせてちし言ぬつかハ消やかの宿も若むかとてに

わとかうちぬ世とせてそうなきのとや　言ハ言ハ由れ

名利…雲の…てき…さて楽しんもの人言

金し并　消やかの宿を草葉にうてと帰りそて如

てくり…なよう…くこて…きくん…世上ハ道頓ま

うして後妬へ…日とも…きしらつていきのころし…逆

言行…ん人すうそ消ゆし人をしてあれきうれや

出て指給とまうもしきく人之　大方たちもなし…三年

於く人会とて行つうとく宿の…し名夢の人雲ある居の空

残く食てて有のもくもの…とのつうや

指ゑ雲字…居のさてしわり　名夢ハん之　於くゝ…

つかとハ世の文…宿の表をきうしまれくてあれ…

宿の上…

書しる所ハ云々注居処所 夕霧の名の房の物語也
上ハ御法の巻より深く蘭の御中の藤袴の巻に
女中の所の物に〈夕霧のもり所〉
さて心なきにより契りの事を思ひ給ふ心
浮舟の有様まで〈〉とおもふとも
すゑのつゆ 雲井雁の事に
同しきはかはり 夕霧の御詞廿二首ハ〈〉行九首也
雨の夜を〈雨ん〉かこちけるとも
まことに行けるさまハ志に給ひしとも
尋の葛葉の風ふき花の葛葉のうらみハ霧のうちに
[illegible] 小野山の夕くれに 路をしの句と 人の思ひたち
[illegible]〈夕霧〉人の思ふあはれの [illegible]

夕やありしと云 源上下巻を見よ [illegible]
此のことくなりたる所ハ [illegible] 跡の [illegible]
ふるさに新しく読よりは此の今のかり所ハ [illegible]
此風吹〈〉よりは [illegible]
[illegible] 廿二の書序〈冬ごもり〉の立より給ふ也
[illegible] の [illegible] の [illegible] 也 [illegible]
人の夕さりの [illegible]
此のその [illegible] 也 夕の直衣ハ [illegible]
秋ハ夜の直衣をきて [illegible] の直衣を用る也
御ともさせし 紅の [illegible] 今日の [illegible] 秋の白風
[illegible]
[illegible]

ものゝこゑ讀経なとけたまへし御声なとはなく〳〵くるしけなる
さりなからの人々やかましきを人もつくらんなとしていと
あはれなる讀経之名香の閑遊くいかにもなかなか
けふはいとこゝろ細くつらし
香もたきしめやかなる名香まいらせてあはれ
香のけふりのゝほりたるにつきてもこの御
心ちもくるしからむをおもひやりてなけき
まことにさそあらんとおもひつゝゐたるに
さてもおほつかなくて
いろなる袿つゝしめたし 橡黒色之黒服を染之
服者の月のかゝ之装束染なし又四位已上袍を
色のかはるゝこと深きにいたみのこゝろもなしと云々

おほむ御たちのおほとなふらにおほつかなしとて御息所のまたおはするに
とかくこそありしかそのゝちのさまはいかゝしちかうて
みなこゝろもとなき也
かくてはいさなにかと名香閑寂 御息所の御事をいまた行なはれなく
又このこゝろのゆかしきとや
そのひとはみなかれし名香の閑雲斜陽に見えわたるを
経文なとおもひやるに
かの今も風さそふ夕日の色の事也 けふの暮れはいとあはれなるを
その秋のさかりの色にまたおほいなる名香のたちそひけるに
御息所のなくなりたまひしとや
いつれにても御時なし 朝夕遊去時過雲女二宮の御事に
かくしつゝ今は世にすくなき事とも也

ありくもの侍し―。相手よりも紅付し時六の数付て
すくなめんとて内息所なくなくと云給し御ことそ
この御けしきかやす入に―名誉のかけひとし所書き也二
云いありて入ぬとも内息所の歌のうしと也
建の御きし―云は今いひとり思ふ歌付て書すさみ
給ふもかしと也 さしやそも―名誉汲さしと云二ともし侍
奈れもそひよりく―名誉のこれなるそしと也
のさとも―吾雀たのめるも さるつきみれしさまるへし
世あれ下とありそも―家の身のふちて おもひとも少しと云
かくのれのかの―内息所の別れ道も世帯の事なれ
を別れ思とも きりあいき―ありめかしと云
又なのめや―秋されいしもしまんすく唐し秋也

ちゃや古きうつりなる秋い
置と付し―云々名誉の霧のかたに出る者の名と共に
思も見え侍のる秋もうらしさんに寺く唐にあり
春とみし―ありわ云―
おもひうや―名誉の心ありをかき行ふんて
おもひのうん―むかし行あれ云ふ家の御姓菜せめのんとも今は
くとけの帰ゆく云すて名誉の詞也
在そうしも―小野とら名誉の御の行也
まちの月―九月十三夜し
おくの山そし―秋の夜の月のさしめりて出いとある
ちしね寝とあうし小倉もくらきかなしと也
小倉山の峯のもみ葉ならし秋の月の面白き時

あるとき夕霧ハ八月十五夜にいたりてかへるにひとつのうた
いとゝしく女のこゝろのけり
一条宮ハ柏木の所へ御息所乃女の宮をなけり
大納言にてありし柏木の事思ふ人のしるし
后おはりてもし雲井雁のこと
おもひをもつゝけのし夕霧乃大将へそありけれ
事のおこり女房衣のことし
うへ陳あやうく雲井雁のこと
六条院の人に陳しかはしあやうきを見せ給
のこるかたに夕霧の結事あれともやむなし
ついに雲井雁ハぬるの雲井雁を
あひそはせ給ひて雲井雁と夕霧物語をしりけるや

新枕のなかりし一あひもたまはてにけり
我もむかしより雲井雁の心し夕霧のあとはかりし人
いとこ
せめてもけり夕霧のまてとくとく
きこゆる人もなし
あくる柳人もなし
ともまとし一所にしてすくしてもせし
ひとりすまし
思ひめくらし雲井雁代
その後
いまよりいひし
世に

しとあまたゐる女のありかしよくいはゆるいにしへのうらみ人とも
世にはまちてくも廿三文の所ノ事を名香の結のうを尊
きみてことよりかかる所あけぬる名香のかき数の尊也
こそ書くしれるにもとなし給也
人しあつかひやしはめてそのらかみに縫山の
ら下り来つ香所しの懐 双香詞也 はそよりんと
にまさみ所りにさのんをや名香のなかき結ゑと
推量すりし
内在事をすし右井香のんと
めめいの見所くなりとし廿三文の見所に名香に思ふ所一
名香り廿三の文よ廿三の事より所をめとくておかれけ
いもんかくわるまちる双香事

おこなふしかくし廿三のてあふひの名もあるへし
思つけし刻割なかし事あり下しあ所ちをきなとや
錦の分しゐはしら香名しの勝とありて大香の名を以て
の名武詞ありと見てくれる文の事組なきりしよ
とりあすく人々と見所て名所つかりしも名香のかくらの
文よ名香へ所くや古の所ひしをそうさくく名香の
思結んし名れいかやうやと見てしかる也所
古くみえし名香の分き毎とし
以ほ名るとし名てありひしを名香のと所を見て事ありと也
何事あるとんつひいあるへきまへたくさ世れ人のかく校
抑も名つひいあるへきまへと世あれなるへあり
六番ねりもし廿二へめ事し新かんおこりし面目也

いはんやこの上に念仏して一南無阿弥陀仏の名をもとなへしもの
波仕大臣のおことばのへにみえたり栴檀の木のはしの賞[illegible]
若葉よりしてかうはしく思ひ知るへきにこそ御ことば深
の経也 所にかられける帝王の何として[illegible]
雨ありて[illegible]雨弥陀と心得ては波仕と[illegible]
いふこそあはれなれ 名誉もその勢別にはあらぬ 十念息
世の人のあはれとも若葉の香の[illegible] 六字経のみ
あひがたきにこそありがたき[illegible]
おやのこゝろをききし栴檀の茎より猶[illegible]おやの心と也
さうくをうけし深き[illegible]経は[illegible]
世にあらは深き[illegible]一念世々の女乃もよほさぬ世の
[illegible]心は[illegible]の世の事を念仏

おぼえ[illegible]ぬことをしてその心をもしるしにて此の事をつとめて[illegible]
身にしめてける 切[illegible]もはなれける[illegible]の事をさとり
こゝろにてするか 柳のもとにや 立身孝経と六巻経

大集経第十七に今の無言行ありて

無言太子 無言太子 波羅奈国王の太子名は休䰟 寒す
端正生而十三年不言 此下畧之 或経には[illegible]
て食せんとすりしが不破 童子は是をそしりて右をあらはしけ
不破すしとて鳥をとらへのちにかくして食せんとす 太子其
罪によりて堕悪道のちに王子と生す 無言太子是
生れて十三年までものいはずのちにものいはんとする 太子
のたまはく 言當罪不言當罪 とて太子は只如如来
[illegible]のちの行をすゝめて無言の行をさかんにする事也
[illegible]

廿一宮しゆうゆ(?)あそく(?)の女一宮ハ源氏の御孫也 是を女楽上の

そうし行ハ朱雀院の女二女三乃宮のかくれかなしゆゑ

中宮の女一乃宮を源氏の御むすめとくの孫也

大将ハ君まつり六条院へ夕霧ばかりゆき行也

御ハ母つきもきもし六条院の人々夕霧の女二をさ

行事ゆしさうし宮の事をかくしかし行し夕霧の

しうさをとらふして

三ところあつさし柏木の失給く三年ようかあん

若菜上の事をききたまひしさうふる人々の行也

夕霧の……朝顔 槿 名利 夕陽 妻子 縁と

御……

ソノ……源氏の……

の事也

源とよ……若菜若世の人の……の行也

あ……女……源氏をあし……

……夕霧の……

行り……朱雀院の事也 源氏の御

あの……若菜の宮の事也

……宮の事 源氏の御

……朱雀院の事也 源氏の御

……若菜……の御

……若菜宮の事……女三……

……女二……女三……

……の行也

此人は此の御時ー岸兼云々事なにゝ夕霧の源氏よりさ様也
我限ゝ夕霧よの孫にも 年
にやま本ハましー夕霧の同年
家のひしもけそー家の事ハども宮行りね也夕霧の人深
氏一の御ひしらし也
いとつましむー源氏の同夕霧の女二のことを生てぬらうへー
此今ある行く源しの思なし御となと云此て源のあ也
かさつめくこえね也
まくよけんとーたんかしすう人の御をとこえし
よれ侍るうしー源しの気見えなるもいとし思給也
此ハ御事ハ三ハ家のこそひとを気さるらなくなく云
女なくの御事ハー夕霧ハ家人なれば女二の宮とか

御あさましけてーの古ハ思ひ給へるかー
病つゝー四十九日の事也
かゝむりー病つくー柏木の中納言ハ兄弟の人々しも数
さまかくし御縫すき見也 年 きんさうらにも柏木
の父大臣のきんさうし給ふしハ柏木の父也
時の人かーー時をえたる人の御事なれどもあ
まうしゝ事ー御家のあさしや 年
けうのさうゝーー女三の宮よりて見てきも此縫乙事と
又女二の柏木の北夕霧よりひき給ふ事なし給も
おかしめしをきねもきうつきうく斎経事おかしき
夕霧とひくわかれをかしき年也 年 夕霧よりかきも
かりてかのまゝしさ事なかりしさそやうりてちかつきらし

一 しやか菩薩の由[illegible]に
申しきうけりとハ[illegible]する事なく出りく[illegible]
すゝまゐりし也
こゝにふかく菩薩[illegible]入道し[illegible]女三の宮[illegible]
下の柏木[illegible]菩薩の入道をわすれ女三の
[illegible]也[illegible]
[illegible]菩薩[illegible]
[illegible]一[illegible]世[illegible]
[illegible]思[illegible]
[illegible]女房の[illegible]
[illegible]女房[illegible]
[illegible]也
[illegible]
[illegible]女三の[illegible]
[illegible]女三の[illegible]女房の[illegible]
[illegible]女房の[illegible]
[illegible]女房の[illegible]女三の[illegible]
[illegible]
[illegible]今[illegible]
[illegible]
一条[illegible]女三の[illegible]
[illegible]

ゐくさのやうのいふハ、ゐくさして、けふハひさしけれ息ぬしつゝ
つゐにしみくらすもハ、女房たち思ひかきこみのふかし
上同じ一条院をもらく侍るしきかんやうに出まつされにたと
いへ葉をけく如何也 体
冬のかし 磯代 宗祇いかなるところとも思はれし 体
かのおほくたゆかし、大和物語にめでたくうたよみて、一条院の
ちか女房の御さまのひら仰せ也
時の目録ありしかくし女房の一条院へ出入まいて
宮へまゐりしかし、廿二ノ心童ていし也 右
さうらまじけ候ひし、大和物語に今ハひかハ春にも
ひとさしと云也 只中に海あまてとかし
ハ侍りしてさく、貞ハ文仕りし、ハ堪忍侍らうとや

おもふ、ゆく御んのうたの所いうふかうしら
へいは閑の事とし、大和物語の閑に成給する心を深くつくし
宗めからの事也し、一条の宮は事也 大和物語の閑
多くいつしきし、宗とこと云也 退てと云
かく第に大和物語と閑く女房のこゝろに候を以て前しめす 廿三に
宗女のかくしまうし、女房のくさしをけたうの方を出家
世女のつかさまかに、折ふしも、ありその家ハ一何かめの事
さこりもうありしや、女房けさし心のうハ来る御中也
さればたて、相木を種すなりしとや
御めしつるハなし、廿二歳ハ相木に嫁しつゝいりしも十余歳
ねは津みつくとミく 十二年 世女はさかゐ ひとゝいふ也

きこえしハ太政大臣くらゐハ女房衣のすそ
みなもとのありまさのあつかひ事も案内を
所々の事なとしるしをく物をあらハしけり
かくれたる中にもおほしすゑてこそ
さしもか様の事共の女房のよし
そきもて侍りし所々もしらぬ

男つれのみなもとにいひ出しける
侍りしかハ萬上根下根の人も
おもひもかけぬ時にひとしく時れのすて
のかれぬ事の侍の道のかたへの心を
おとあるへきあらし事を
かくしてさらに侍らしかと申侍るなり

あそてこそかくやうにゆへあるなれはさりけれハ人々
三ヶ条の事とも
ゑいしけることにしたかひて
まつ女のいへにとりて人のかたへを知りて
さのひとつはせハ世に知りかたくうちつくし
なかなか人のをもうたかひ人まても皆はしらさりと
おかせハかのさもえてゆかしき
人まてもなれハしけるに

（貼紙）さてもそのさきくらん巳前（?）八の時まかりて…人までも…のしるしかなきにたへ…

人まても京中にて菩提の心にもなく
えの人にもいかなるへきにも
さくら
ゆてもおもひいて

きこゆるは大和の国きこしめしたるは女房花の中より
なへて[illegible]すきなる事とも[illegible]の中を
[illegible]事のよしを書き入れてあそはしけるを
[illegible]とて中宮[illegible]りてみすへき[illegible]
紫式部若菜のみちの人の女房の名をゆつり
そのままにて侍りしと[illegible]
男の[illegible]ふしくて人々[illegible]くみえて侍
[illegible]ものをと上より下まての人[illegible]
[illegible]時ひかしのまへの[illegible]
の[illegible]の月の[illegible]のかを[illegible]
おもひ[illegible]事[illegible]
かくれてさの[illegible]と也[illegible]

[illegible]とふく[illegible]
[illegible]人の心[illegible]ものをと[illegible]
[illegible]にさやかなるひとしの[illegible]
二[illegible]人のひとしくかはり[illegible]
[illegible]人のくはしく[illegible]
[illegible]とせは[illegible]
[illegible]の人[illegible]
おもはせ[illegible]のえて[illegible]
人[illegible]もうらてし菩薩[illegible]
[illegible]てもうちて[illegible]
[illegible]人
[illegible]なりてもさし[illegible]の[illegible]

[illegible]

世俗の[illegible]

[illegible]博奕[illegible]目[illegible]車[illegible]

[illegible]

まの御はきさん浦嶋子かとあり
其としおけるそ〜浦嶋子といへる人也けるか絹也
我か身は〜よの人は〜とかく身のかくれ事也
舟浦にはかし名寺の名にてかけ給ふとし五十余年
のかくらぬ女房元思之
女の衣中に終りぬ〜女三のくはまりて四人あつとい五十余年
の方の人いさらぬ之
家の内にあふそ〜女三のよしみ
嫁しけるく〜嫁娶の作式といふもくらうくへし
さくり終りく〜押すまいりすまて夕暮浮り給ふ之
行ふあま終さて〜家へまかり給ふく形の息示のかくを
あかひさみ給ひ人まゆすして伸ち給ひてとやし出物を
夕暮悲しみて名れ〜一身のかくわかれんとて

歩くはらくく〜夏の夜給くへ終りくてる事す候
中く押せおそはるく
花のさあはも俗まて此方のさえておもて世日ものと体
此たまちひくい身のいあしろつき事也〜
いとけなく〜夕暮の絹いとやさしき〜おとなしき絹とまさ
いさらく人きく〜すきくのやしとも
あら君ららく〜夕暮をさして出給のや絹也
俺さあらぬ世〜夕暮の絹文の人と夕暮のや給之
人とり夏ま〜北来とら袖をおしらぬ給らや
それりは身くさりは〜あれ給絹夕かねを
俺さ思ひわの事〜世をはなれ〜花いまとさりは世をまちの夕暮
はや給月〜ひくい給のいつかぬ其之宮ま世ほらぬ

もいへり　[illegible]にもあらね[illegible]
謂ニ似たる人[illegible]て[illegible]
[illegible]人（[illegible]とも云）[illegible]久
[illegible]と云[illegible]けるといふ詞[illegible]
和銅之年の[illegible]女君の[illegible]
[illegible]てもつきてもありと嘉の[illegible]
いて御批判あるへき[illegible]て此[illegible]
八嘉の詞よみ[illegible]て云之よみ[illegible]とい[illegible]嘉[illegible]

[illegible]宮[illegible]の詞[illegible]
[illegible]の詞[illegible]あ[illegible]

此[illegible]なし[illegible]女三のある[illegible]
宮に[illegible]女三の宮[illegible]
これはたらち[illegible]女房衆の[illegible]の思ひ[illegible]
[illegible]又子[illegible]女房[illegible]
男君の嘉之[illegible]事[illegible]
給[illegible]氷[illegible]
宮[illegible]雌雄一双[illegible]独宮[illegible]
[illegible]時を[illegible]
[illegible]
詠[illegible]直ニ対面[illegible]花
[illegible]
[illegible]

とゝいふ　ことゝの給ひぬる事を思ひとゝめいはせとも
詞よりそ人のうへとも見えてこゝろをさゝはかしき事なれ
とて女をせいしつゝらむ人〳〵（侍女なとを云也）をとゝめて
是も女の事とも云るゝ也けれと此詞おもしろくきこえて[illegible]
おなし絵の事のなかを見給ふに（こゝろみ）さみた女君のしわさなる
ましひとつはやはりそこにつきてしもあるへき女君の心を
いひなす批判なとそいはれてこゝにいふかはりにて云る
八女君の詞にあらすして云るゝなれはかく見えとは女君の
[illegible]以女君よりも私案をさしおいて女君の詞なんとせし
はこ[illegible]ねしは女君のあはれにもはかなく善悪を給ふなれ
[illegible]給はんとするとや[illegible]とてかなしう給ふを見て[illegible]
思ひてかなしく見るきの詞をしくゆかしきあはれなるなり

さて女君の思ひかけすしてあなたをゆかしく思ふ人〳〵（[illegible]）女二の宮
の宮に思ひよりしかは女二の宮（[illegible]）事にかたくして見えしかと
これなら女君を女房衆のなかにとも是の思はれかた
人の心にしたかふ女房なとも時々の事なりとおもひ定
男君とは善心にて女君事なからもいかなる事ありける
給ひとものはいかゝはかりて[illegible]

山宮は女二の宮の人雌雄一所に住む事を独宮の事をいふ人
とりてかはらんあはれなるにて山宮の御心をかなしむ時にはかられける
とかく人々ものかれてもあはれなることなれは（[illegible]）何もかく
思ふ事もなしとはありけるきことの直ニ対面してかくは申さん事
をもちつゝめにし独宮にとゝめて人の事をかなしう思ひつゝ
思ふをいふ　さりけれとこゝにありけり帰るかへりとしてとも給ふ

おほえたる人　請人御　いとあはれなる御ありさまなるへし君なりけり（あはれなる事也）
そめ出ん之　件　魚路の例ともはらくしらぬ宮河はめつらしからぬ
ころの風まむすめあさましさところ人さしまさらいふ也
後撰集云合於刈河岩しいつはあらし給ふ佐宮河
のなかなりてしやしらむ
みの大臣まうけし後佳大臣の名さし　花散里の例に
そなへりたかのうまにし　もちろ里のうちに
是やなりも花散人のしるまりの例（拾遺集云…）
わか名かしもしも花散りの宮へ思ひてあらしとも宮恵京
遺言のうちにも相本もいはる心のまゝの御ひきまつり
之也　いふりけり世心の事に
何の心かよはれとて心くしのもなかあらぬ

是なりしへ尼し給ひてこそ世のなかいとゝうくこそまいのきと給ひつゝ
しるしきさやしおもひまさるなれなともとしい宮なかり給ひて
まてのゆひこえをい女房へとうそうらうんと花散里の御かた
思ひしらぬくいつゝらい宮のよしやらし桂の御かたへとなりけ
なとなり嫌疑いさくらふんえ尼しもなりて給ひてしとこそ
よるなりてんと也
後の宮ありし花散里の御かたの御ありし
人のみかりや花散里の御
えなかもめきてしきふまろの事に里のゆりにやしの
帝の事也
いとふもし花散里の御なかかふか
女御にも

さしてうくさきて花散里の御かたりのいそりやすく
なきかいたそてさしやかたちや
かくさこうよし夕霧の御花散里の御方わたりてとゝのへり
わつゝやこしかけしさもしおいひそて
あきあやしくわくれたくしや
さあくけりかくてしまことにちかまの事
けれとも花散里の事し夕霧の御
御のくらさしあけくらきつかくをきもめつらしく
らひとつ池のやうふといさら花ちる里の御方
まちてく過如日月く食しいふもらくる
さそしおりさし花散里のわかうしそわらい御さうくし
てきくしくさらいすらしらかくし宮の御

さいとえさせいてとかう行幸とかく経しりて
さうりけれとやもさけ道の教例あるし
御なくへ弘徽殿のみこ
あまり一宮の夕霧のすけもり経し
さうつして経ひし一宮の御方へ夕霧りとらく見経し
御らけく経ましさり一宮の御方うち夕霧御経し
おあくからもとれくし給きてえんし夕霧の御子し
せちハてのうらし雲井雁の事し我のおもし
めしやんあえもし夕霧を雲井の御おもひくし
さくおもうるもしめさうりのんし
御なれし雲井のめしおと夕霧りのくけ経し
思ひこしてえし雲井の御方やすらてえてきよ居の御

かうやうの事ともさへたまはりてまかりくの御門へし
給はせ給ふ上ほし雲井居の御女房のまいりて能くの御いらへし
まし此事を聞て宮とりて参りの御雲井居のまし
めくらへは御申し雲井居の御 [illegible]
御きかはり御雲井居の御使し [illegible]
かくれおはしまし女房の御雲井の事よろくの御 [illegible]
おりくしき給ひて御もとや鬼神のやうり
あはせ給へ参りの御まさ之鬼神はみるまい
ぬへおそろしきけをつやうし
御おはしまして雲井居の御おはします事 [illegible]
さへおはします雲井の廿二のもと参り御 [illegible]
てんかし谷の事参り給ひて御 [illegible]

こよひまてよし参りの御前御事をよくいそかし
さて又給ひける雲井居の女房も花よ花を
の御を難くましく女房の男 [illegible]
せらいは世 [illegible] せん [illegible]
何にお [illegible] すへ
おもう和の名の [illegible] 泉門 [illegible]
ききは [illegible] 雲井居の御 [illegible]
雲井をまへて [illegible] 女房 [illegible]
かはりて [illegible] 雲井居の御を [illegible]
ありさま [illegible] 和字 [illegible]
此世をて廿二の事 [illegible] 女房 [illegible]
あらひ [illegible]

云事もなくつましく成りける女に文やりしに見すらん
ゆかしからすいへりし雲井居の事也　此段一説に
文女ニ文ト云事ノ体
おもてにくくし女房と雲居居よの中をもみそめしを
女房絵にかきし八雲井居のくらゐしは志ありし也
女へのあはれにも女房の雲居居ありて所にゆく人の
むかしは人の心ありしを仏法をも申し給ふ人にて
合せてかくれしにてやみにし事也　此文を給ひ
それにてかしこき女房のごとくいはれし也
ゐあへてしりきへしといひてもかくしてぞまかりし
ひとつ思ひをきしものなきのみなし
ならせし給へしも思ふともいはする事なかれ

いふ事も云ふくしく女房の心をさへ給ふらし
袖にひとつ女房の袖をもぬらしたまへ
なりし身をしらず女房の事也　離るる人のうらみの也
いつしか法師の衣をまとひてすみなれし人を
こころもなし尼となりしかは人にうきこころ
自分はすゑんとなりて年を今はてたる我
身の事をしらしといはれし世をもいとふ
のちの法師はなかしらで尼となれり
あはれにいくしといへしものなれはまつ思ふ
そのちの事を嫁せられし事ともいひけり
いはれたるもまたしく女房の人の涙
のちの女のをかしきことなれはかなしくも也

さるはさそめでたくかはりつゝいとゞあはれに
夕霧とかくかうして思ふも又人のやうなるを
そのおもひはるゝ所もなきかなしめでたくて
かきなし給ひてめでたき新緑せさせ給ふとや
らうたきそれ夕霧の御かほばせ給ふとていかにと
夕霧のいひいれにかよみてなつかしや
草枕かりやどしや大かたいふことや体あのさかりやも夕霧の
のきはひらかるさまありかをいふや
かくらむにはかくさうしゝ女二の事也
人にかくてのちはいはぬ人この名をしのび給ふ
思ひいれかたく女二にても思ひたまへし
出かけつゝくゝの事御心ちのゝ夕霧のいかにかなし

こし給ふし
落葉の宮の事也
あはれなる所にしてたゞ女にしきゆかりて思ひやるよ
落葉地也人もゆかしゝ女二のみやはありける人
ひさしうもし女房の御ことわりなるや女二の宮
いふしあやにくし落葉の宮おぼしめす女二の宮をさらく
思ひやらし夕霧の御心也
勅使なとまうしし夕霧の御心のまゝに勅使をまいらせ
こゝろやすき事をもし給ふまじきかし
ゆくへもしれず又怨恨の思ひのまゝにてこゝろの事ならむ
夕霧の心をこめられし御心ばへいとゞ
人もしらしかしこゝろにも落葉の宮の
みやひかゝるかの雲の根にかゝる又女房にも侍るなり

ゆりうイかへのこゝろし名残の道人にきくへりしき今にしい
世にもへのまことに然見えさへてへもえりしも
ちらくゆかしけれいし言葉ひ之世をへる事にありしとも
事ゆるに行てさら行ままの事ありけるの世也
ゑらりさくしを言葉の思けしらえ(?)とて事かし人の
中見いまいろへかしとも也
こゝろをまち連いし かゆるの事
おもひし言葉の字理もしる事 又さへうる
らいせ二の事 双華の地え いかねらむ
人かうし行ふかろこゝろし 女二の五友人の行
こよいさかりさる
いかゝしつ かさすれし 名勝河

いかなれは思ひそいふたらむ
思ふ人にしも思ひしこゝろのおもふそれぬらんよいふ事
とめしも尋ぬるけくちねと也 中のいうらしは素の
思ひわびて入りたまへらしと也 体 あはれを抄に
世中をありしかての神月とあらん
さけきいぬふらし 村雨のころおもし神な今ゆ
かしらも声しめしあやのかみ心あり
月とさうちあし 世中はうきをひとつに身をなげは
深淵も入ぬし底のしるのそれし
跡なくもつきあのり潮わたしらはさる
なりもあつしけれ
なりなくさしてなりかほの句也

いまはしかたへいはみかは人々御物識ノ詞ニテ有之
ちかくなくしてはいとおほえ侍らぬに
世の中をいと程なく叶はすおほしやられんと
なりゆくほとなりしや
あはれなる事なくいとひ給ふ事のあはれなる
三条の君の一条の御方雲井の雁のまゝ
ちかくもなりて一条の君ぬるのみなれはなくなれ
いまはさきて思ひつゝ給ひ
思ひかけぬ事なりし雲井の雁のかたへ申しきて給ふ
なからくせうとにしらへ給ひぬ
かしのまゝにしきりの給ひ
かくてへ一女二の宮
はかなく一条の心
いまはたてまつらせ給ひて一条の御方の大殿の
おほんなる事のかへりまいりてやうに御まへの
わひしくおほしめしさへおほひおはしまし給ひ
一条の御方いまはていてよし
ひいはさをかしうへ一条の御方すまひおほしけれは
御ふみなとおほし
こともかくし一条のかた一條中将れて
いまはいかゝ一御のおほしいつ程のなくさん女宮
宮へのかへ一條の宮の
あはれ御ほかにも一條の目てみちをおほえてちかつかしく
人の女のいまはしおほえて
山里ににもいはれ人の宮こなたへかへりおほしめしつゝ御心を

うすく[illegible]
[illegible]て[illegible]
て女房の[illegible]
女[illegible]女の[illegible]
[illegible]ひとつの[illegible]
あはれ[illegible]

この人[illegible]あはれ[illegible]女[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の人の[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
女郎の[illegible]女[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

しかせてわろし也
世をすてこそいへし　といへりとりそのへのむもしハ
なかくしの世やしなへりのめむもへしまうの許
すかへく売へしかれともちとの押しへの思ひれ所
ありきむかしひより行へし
淵のこゝろ行へし三位中将の墨ゆく常とて
後らへ女房ちりきれく出門のゆへて波後之
ちりまそらせし名ありの息てけへし
今除くとちてへしのすみりのなとおなるかめ女ハめ出

わらハへとものくまおもしろし
さかりをすくし行もさらのこと
今ハくちくし名ありのかはらの事也
あそひしあハく花さま也名ありのかの宿
御事も今ハしやみ后のいへく
あやしき人しいはひらの事也
なりのなりやし女房の宿を中宮をの御わかり
のなかしきしかの宿としてきこえ候ハ
いはたハなかしきみ常なき抑とひいはす
是さへいかなりしきさ世の御
あなかし　御わか綺しく

かくてハ、女三の宮の御事
いとゞおぼしなげく
さて御ことゞもの御沙汰ども
このごろハ
つれ〳〵とものし給ふ
ことしも女三の宮をあはれとおぼす
まことに心ぐるしうおぼしめす
御こゝろのうちにおぼしつゞけて
きこえさせ給ふ
おもひのほかなる
女三の宮の御ことゝも
あはれにかなしく
しのびやかに
おぼしいでらる

かゝる程に、女三の宮の御事をとぶらひ給ふ
春宮ハ、女三の宮の御ことを
とのにもおぼし、宮の御心
うちとけぬ御心の
うらめしうおもほしたる
御心ばへのあはれなる
よろづの御ことゞもを
あはれにおぼしつゞけて
人のおもふらん女三の宮の御
衛門督ハ右大臣の御子
大将の君の御心ざし
かくておぼしけり
めづらしき御事

あまたし　しし　人　に
つけつて　くへ使之女二人々かゆ　ゆるを
くヽのかし遣人思るのけのりらうはれ絵の所ものてかく
わのえくせそー参かするの事さ内使りましつうれ
あかせりはくさしや　家へまして一女二人
さ代へはよおうらくー　あ　の使　の事之
あしへをおりひあくし柳本の使の事之あらとら使紙に
かくりちおれるくなちー　おくの使の詞之
は深くーゆかさ分すやしおおもし女二人をうろし
こうへまてせー九日息所の事を思考行之しば近へう
家の書行をきまをそぶら殿て日息所のうりて主之
あかし　之　日午

あそことを内さまふー藤蘿石渡下筆俱　白氏文集
家ゆやーせ二ることに、何もそのまこてらさきの
あうらく云なものはとゆうそとしや
ゆくにへすあかー人ーしそくしと公事ゆりけれは
花よりへ前りありしも
いうるーしく先くかふるおし女二人　名ありの事之
比叡の君ーそるを唐の事之
内待のとけし　惟光の女　名房のあおひ人之
かのあつりいうくさし内侍のかそ受け房の常ま稀
立かのさなる罪名にける女二人のかはくもりるかくらる人と
くふゝへ殿まこー・いくる家ひさしを
一家に

まいて いよよもしと しこ、
かやうにしるしたる事ともありて人の
しきみをさのへてけうさやしく思ひてしぬ
くろ事もうさんしに
かせもことたくしきかた女房の心ほかせい女二の宮に
人の世にしまかた房の心も人のよそにまかりしか
見えことも月まかなとくしおなかとけし物語の君の
こゝにて人のちもしとあうまきちとおもふやうに
大てんの人の世のまんつるの先きあるうら給ひて
むかしてよらに御かかりしをかけしるし女房の
中とくへくらひくあるかのそうことへ

このめけぢやうぎのしつ女房ことが中をたしと給ひなむかなし
らひからしやうらの給ひてゐかりつ侍りしこけとも
まゐらたりて、この給ひし女房しの中綱
しけ給ひいして女房の御勝
おかい君しえむかし女子の事に
もとよくもすへしこくまかせつるかは十二人にて系図
うへのよく給はせ給ひつるかし
さんしの御わたり御覧じけ給ひし後しの御事
はんしひめしるかりの逢きくろう業ひと
かかし紫式部を流し出家の本
ひの

111 X
3
30